

昼食をいただいた隣花苑は約600年前に建造された田舎家といわれる。一見簡素な造りだが、襖や雨戸といった建具を全て引き込む戸袋が室と室との間にさりげなく配置され、間の可変性、内と外が一体となる巧な空間構成を生み、どこか懐かしい日本の住空間を感じさせた。

三溪が晩年を過ごしたという白雲邸は大正期に建てられたとは思えないほど柱、梁の部材が建物をしっかりと支え、床壁にもキズたわみは殆どなく腕の良い大工により建てられた建物が家を愛する主人により丁寧に手入れを繰り返され住まれてきたそんな歴史を思わせる佇まいがあった。天井の高い洋間や半畳ほどの電話室もあり時代の変換を感じさせた。

今回の見学会で一番印象に残った聴秋閣は、三溪園の中でも高台にあり、水路、岩場からのアプローチ、紅葉が周囲を取り囲む絶妙な建物配置であった。入口の床には角形のタイル形状の木が敷き詰められ茶室であるが2階建てというモダンな造りでとても徳川家光の時代に建てられたとは思えないものであった。

